

2025年の大阪万博開催も決定し、関西では「なにわ筋新線」等の新たな鉄道新線整備も検討が進みそうです（国土交通省は、2019年7月10日、鉄道事業を許可。2031年開業予定）。そこで、建築、土木、鉄道、都市開発等の計画や設計の参考になるような事例を中心に、幅広く紹介することとします。

【地下鉄駅2題／コンクリート打放のワシントン DC メトロ、世界で2番目に美しい地下鉄駅・美麗島駅】

1. 「用・強・美が揃ったワシントン DC メトロ」

「用・強・美」は、古代ローマの建築家 Vitruvius が提唱した建築に必要な概念である。1976年に Harry Weese が設計したアメリカ・ワシントン DC の地下鉄駅は、プレキャスト・コンクリート製のセグメントを間接照明した美しい空間となっている。

ワシントン DC のメトロ駅はコンクリート打放し仕上げを用いたブルータリズム建築の傑作の1つ。2007年に AIA（アメリカ建築家協会）が発表した「America's Favorite Architecture」150選のうち106位に選出されている他2014年には同じく AIA の「Twenty-five Year Award」も受賞している。

駅舎の壁・天井は、アッパーライトによるプレキャスト版の陰影が絶妙で、管子トンネルのような落下が心配な天井板は無く、コンクリートのひび割れの発見も早い。土木構造と建築デザイン、快適な視覚環境をうまく結びつけた機能的な設計で、用・強・美のバランスが取れている。（なお、欧米人は光源が眼に入りグレアとなることを嫌うので間接照明が好むが、ホーム面は10円玉を落としたり見つけにくいほど低く、日本人には暗い感じがある。）

土木と建築がうまく融合した例として、今後の設計の参考になればと思う。



1988年 筆者撮影

2. 「世界で最も美しい地下鉄駅」第2位の美麗島駅

写真は、台湾・高雄市の MRT（地下鉄）美麗島駅のラチ外コンコースである。高雄の発音は Kaohsiung / カオシュンで、美麗島站（駅）は、メイリーダオ・チャンと読む。

美麗島駅は、アメリカの旅行サイト Boots n All が2011年に選出した「15 of the Most Beautiful Subway Stops in the World」で第2位にランキングされている。上記のワシントン DC メトロとは正反対のコンセプトであるが、成功例といえる。ちなみに、日本の地下鉄駅は15選にノミネートされていない。

地下のラチ外コンコースの天井は、イタリアのステンドグラスアーティスト Narcissus Quagliata がデザインした4,500枚のステンドグラスで覆われている。「愛と包容」をテーマとした作品は「The Dome of Light」と名付けられ、直径は30m、総面積は660㎡。地上の出入口は日本の建築家・高松伸の設計。

美麗島駅は高雄市内を走る2つの地下鉄路線の乗換駅で、交差点の直下にある。コンコース上部は道路となるため、照明は自然光でないのは仕方ないが、駅のパブリックアートだけで観光スポットになる一例である。



2014年 筆者撮影

上田 正人

阪急設計コンサルタント株式会社